

都道府県別賞一等

見えない安心に守られて

東京都 三輪田学園中学校 二学年

水庫 優希

今年の春に大好きだった祖父が九十二歳で亡くなりました。私にとって、身近な人の死は初めてで、祖父がいない空間が寂しくて今でもまだ慣れません。亡くなった後は、葬儀や手続きなどで家族はとても大変そうでした。葬儀が終わってしばらく経った頃、みんなが集まってアルバムを見ながら思い出話をしている時に、葬儀にかかる費用を祖父の保険金で支払うことができたと話しているのを聞きました。これが私にとって生命保険を身近に感じた最初の出来事でした。

今回の作文を書くにあたって、「うちも保険に入っているの？」と父に聞いてみると、「生命保険やガン保険、自動車保険などに入っているよ。」と話してくれました。毎月の保険料も教えてくれたのですが、私は思わず「えっ、そんなに？」と声をあげてしまいました。自動車保険は分かるけれど、父の母も元気で、病氣なんてめったにかからないので、正直、保険料がもつたいたいと思ってしまうたし、預貯金との違いがよく分かりませんでした。

それから、生命保険文化センターの動画やマンガを読みました。保険の仕組みや役割がとても分かりやすかったです。預貯金だけでは十分にたまる前に何かあったら生活が大変になる。でも保険は、入った時からもしもの時に大きな保障が得られ、家族を守ってくれるものなんだと理解できました。「保険は助け合い」という言葉も心に残りました。それから保険は、一度入ったらそのままではなく、その時々々の家族の状況に合わせて見直す必要があることも知りました。

父は、「うちの場合は、子供たちが成人するまで、安心して学校に通え、生活ができることが一番大切なことだから、それまでの間に事故や重い病気にかかり、十分に働くことができなかった場合のことを考えて保険を選んだんだよ。」と話してくれました。実際には、私が生まれた時と家のローンを払い終えた時に見直してきたそうです。そして次は私が社会人になった頃に見直す予定だと聞きました。

母からは、もう一人の祖父の話聞きました。祖父は五十代で二度も脳梗塞を起こし、仕事を辞めざるを得なかったそうです。でも、若い頃から入っていた保険に助けられて、今も治療や生活を続けていられているとのことでした。母は「おじいちゃんが仕事を辞めることになった時、おばあちゃんは専業主婦だったし、お母さんもまだ学生だったから、貯金や公的な支援だけでやっていけるか

第63回中学生作文コンクール

ものすごく不安だったはず。保険に入っていてすごく安心したと思うよ。」と。保険は形が見えないし、「本当に必要なの？」とか「もったいない。」とはじめは思っていました。でも、父と母の話を聞いて、将来への不安は見えないからこそ、備えることで、安心に変えてくれる大切なお守りが生命保険だと気づきました。身近な家族の中で、保険に守られた経験があったことも今回知ることができました。

私は両親にいつまでも元気で長生きしてほしいです。だから実際に保険のお世話になるようなことは、起きてほしくありません。それでも、保険の必要性や大切さは理解できたし、気づかないところで守られていたことへの安心と感謝の気持ちを持つことができました。将来自分が社会人になった時には、しっかりと将来への備えを考えられる人になりたいです。